

仙台市文化財調査報告書第188集

# 元袋遺跡

—第2次発掘調査報告書—

1994年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第188集

もと ふくろ 元 袋 遺 跡

—第2次発掘調査報告書—

1994年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

## 序 文

日頃、仙台市教育委員会の文化財保護行政に対しましては多大のご協力を頂き、誠に感謝にたえません。

元袋遺跡が所在する太白区大野田地区は地下鉄の開通や都市計画道路の整備に伴い、近年急速に開発が進んでおります。開発に伴う発掘調査もこれまで数多く行われてきており、縄文時代から現在に至るまで人々の生活が営まれてきたことが明らかにされつつあります。

この度の元袋遺跡の発掘調査は昭和61年の第1次調査に続く第2次調査になります。前回の調査に統いて平安時代の住居跡などが発見され、当時の人々の生活を解明するうえで、貴重な成果が得られました。

発掘調査、整理に際しましては、地権者を始め、地元の皆様から多大なご協力を頂きました。記して感謝申し上げる次第であります。

先人の残した貴重な文化遺産を次の世代へ継承していくことは現代に生きる私たちの大きな責務であります。これからも文化財保護への深いご理解とご協力をお願い申し上げまして、刊行のご挨拶といたします。

平成6年3月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒英

## 例　　言

1. 本報告書は、宮城県仙台市太白区に所在する元袋遺跡における共同住宅建設工事に伴う事前調査の報告書である。
2. 本書の編集・執筆は仙台市教育委員会文化財課・斎野裕彦、川名秀一の協議のもと、川名秀一があたった。
3. 本書の文章・実測図中の方位は真北で統一してある。
4. 検出遺構については、遺構略号を次のとおりとし、遺構種別に番号を付した。

SD 溝　　跡　　SI 竪穴住居跡　　SR 河　川　跡　　SP ピット

5. 出土遺物については、遺物略号を次のとおりとし、各々種別毎に番号を付した。

B 弥生土器　　C 土師器（ロクロ不使用）　　D 土師器（ロクロ使用）

I 陶　　器　　K 石　　器

6. 本書掲載の第1図は国土地理院発行の5万分の1『仙台』の一部を複製使用した。
7. 本書掲載の写真1は国土地理院・昭和36年撮影の空中写真を使用した。
8. 遺物実測図の網スクリーントーン貼り込みは黒色処理を示している。
9. 本書の記述による土色は「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）に基づく。
10. 本遺跡はこれまで元袋Ⅱ遺跡（仙台市文化財登録番号C-266）、元袋Ⅲ遺跡（仙台市文化財登録番号C-267）（昭和61年仙台市教委調査）として登録されていたが、従来の二遺跡を含めた周辺一帯が遺跡の範囲に含まれることが明らかになったため、仙台市教育委員会は平成5年5月に新たに元袋遺跡（仙台市文化財登録番号C-266）として範囲を拡大して登録している。

本調査地点は、従来の元袋Ⅱ遺跡の東側隣接地にあたり、元袋Ⅱ遺跡として平成5年4月から5月にかけて調査したが、上記の経緯により、元袋遺跡第2次調査として報告する。

11. 本調査に関わる出土遺物・実測図・写真等の資料は、仙台市教育委員会が一括して保管しているので活用されたい。

## 目 次

### 序 文 例 言

I はじめに	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査要項	1
II 遺跡の立地と環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
3. これまでの調査成果	5
III 調査の方法と調査経過	5
1. 調査の方法	5
2. 調査経過	6
IV 基本層序	7
V 検出遺構と出土遺物	7
1. 垂穴住居跡	8
2. 渕跡	18
3. 河川跡	18
4. その他の遺構と出土遺物	19
5. 出土遺物の検討と遺構の所属時期	21
VI まとめ	22
写真図版	25

## 図・表・写真目次

第1図 周辺の遺跡	3
第2図 調査区位置図	4
第3図 グリッド配置図	5
第4図 遺構全体図	6
第5図 基本層序・土層柱状図	7
第6図 S I 1 壁穴住居跡平面図・セクション図	8
第7図 S I 1 出土遺物	9
第8図 S I 2 壁穴住居跡平面図・セクション図	11
第9図 S I 3 壁穴住居跡平面図・セクション図	12
第10図 S I 4 壁穴住居跡平面図・セクション図	13
第11図 S I 5 壁穴住居跡平面図・セクション図	15
第12図 S I 6 平面図・セクション図・出土遺物	17
第13図 S D 1 溝跡平面図・セクション図	18
第14図 S R 1 河川跡平面図・セクション図	19
第15図 その他の出土遺物	20
第16図 弥生土器拓影	20
 第1表 S I 6 壁穴住居跡ピット註記表	16
第2表 出土遺物破片集計表	22
 写真1 元袋遺跡航空写真（昭和36年撮影）	25
写真2 遺構確認状況（南西より）	26
写真3 遺構重複状況1 S I 1、S I 2（北西より）	26
写真4 遺構重複状況2 S I 2、S I 6（北西より）	26
写真5 遺構重複状況3 S D 1、S I 4、S I 3（南東より）	27
写真6 遺構重複状況4 S I 3、S I 5（南東より）	27
写真7 基本層序	27
写真8 S I 1 壁穴住居跡全景（西より）	28
写真9 S I 1 壁穴住居跡遺物出土状況	28
写真10 S I 2 壁穴住居跡床面状況全景（西より）	28
写真11 S I 2 壁穴住居跡床下状況全景（西より）	29
写真12 S I 3 壁穴住居跡全景（南より）	29
写真13 S I 4 壁穴住居跡全景（北より）	29
写真14 S I 5 壁穴住居跡全景（北より）	30
写真15 S I 6 壁穴住居跡全景（東より）	30
写真16 S D 1 溝跡土層断面	30
写真17 S D 1 溝跡全景（西より）	31
写真18 調査区南西部全景（北東より）	31
写真19 調査区北東部全景（北東より）	32
写真20 出土遺物	32

# I はじめに

## 1. 調査に至る経緯

元袋遺跡の所在する太白区大野田地区は、富沢周辺の土地区画整理事業に伴い、交通網の整備・拡充がはかられ、急速に都市化、宅地化が進みつつある。

平成4年5月12日付で地権者である板橋與一郎氏により共同住宅建設の発掘届が仙台市に提出された。この申請地点は元袋II遺跡の北東側隣接地にあたり、遺跡の範囲に包括される可能性が高く、遺構等の存在が予想されたため、協議の結果、試掘調査を実施することにした。

試掘調査の結果、3×23mの試掘トレンチ内において竪穴住居跡の一部と考えられる焼土、炭化物が分布する場所を4ヶ所確認し、土器片の出土がみられた。この結果から元袋II遺跡は北東側に遺跡の範囲が広がることがわかり、再度協議の結果、住宅建設の範囲を中心に記録保存を目的とした事前の発掘調査を平成5年度に実施することとなった。

## 2. 調査要項

遺跡名	元袋遺跡〔宮城県遺跡登録番号01090 仙台市文化財登録番号C-266〕
調査地区	仙台市太白区大野田字元袋1丁目18-1
対象面積	959.0m <sup>2</sup>
調査面積	232.4m <sup>2</sup>
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育委員会文化財課
調査員	斎野裕彦・川名秀一
調査期間	平成5年4月12日～平成5年5月11日
整理期間	平成5年12月1日～平成6年3月25日
調査参加者	阿部 敏子、阿部みはる、植野美登子、工藤きく子、小松千代子、 昆野コトジ、菅井 君子、菅井美枝子、清野 寛、蓮沼 英子、 蓮沼 秀子、樋口より子、三浦たか子、宮城 富子、村井二郎松 青山諒子、山田やす子
整理参加者	青山諒子、山田やす子
調査協力	地権者・板橋與一郎 株式会社早川礼治建築設計事務所

## II 遺跡の立地と環境

### 1. 地理的環境

元袋遺跡はJR東北本線長町駅より南西へ約1km、地下鉄長町南駅から南へ約600mの地点、仙台市太白区大野田字元袋、袋東地内に所在する。周辺は名取川と広瀬川によって形成された宮城野海岸平野に含まれ、河川に沿った自然堤防とその背後の後背湿地からなっている。この自然堤防を形成した河川のひとつが西の青葉山丘陵に起源をもつ名取川の支流・荒川で、富沢地区と大野田地区の間を曲流している。北岸の富沢地区は古くから水田として利用され、南岸の大野田地区は水田、または畠として利用されてきた。当遺跡は荒川が南へ大きく流れを変える地点の南岸の自然堤防上に位置している。標高は9~10m前後で、周辺の現況は畠、水田、宅地である。南へ大きく袋のように開く地形が「袋」の地名の由来といわれ、周辺には「元袋」の他、「袋前」、「袋東」の地名が残っている。

### 2. 歴史的環境

元袋遺跡が所在する大野田、富沢周辺は仙台市内でも数多くの遺跡が分布する地域である。

旧石器時代の遺跡としては荒川の北岸に位置する富沢遺跡が知られている。その第30次調査では当時の焚き火の跡と考えられる炭化物の集中、石器、樹木・種子を中心とする植物遺体やシカのフンなどが発見されている。

縄文時代中期以降になると荒川流域の自然堤防上には数多くの遺跡がみられるようになる。南岸の下ノ内遺跡では縄文時代中期、六反田遺跡では後期の堅穴住居跡が、また北岸の下ノ内浦遺跡では後期の配石遺構が発見されている。

弥生時代以降、荒川北岸の後背湿地では水田が經營されるようになる。富沢遺跡では弥生時代中期から後期にかけての水田跡が重層的に発見され、現在まで8期にわたる水田の変遷が確認されている。また下ノ内浦遺跡では石庖丁、大型蛤貝石斧を副葬した弥生時代の土壙墓が発見されている。

古墳時代の中期から後期にかけて大野田地区には古墳群が形成される。これまで13基の円墳が発見されており、円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土している。伊古田遺跡、下ノ内浦遺跡、六反田遺跡では堅穴住居跡が発見され、集落跡であることが判明している。当遺跡の東方には多賀城造営前の、7世紀後半から8世紀初頭にかけての大規模な官衙跡である郡山遺跡が所在し、官衙遺構について二時期の変遷が捉えられている。

奈良・平安時代になると遺跡の分布は全般的に拡大し、その数も増加する傾向にある。富沢遺跡、山口遺跡では水田跡が、下ノ内浦遺跡、伊古田遺跡、大野田遺跡、元袋遺跡ではこの時期の集落跡が発見されている。



番号	道跡名	種別	立地	時代	番号	道跡名	種別	立地	時代
1	陸奥國分寺跡	寺跡	沖積地	奈良・平安	15	長坂浦道跡	丘陵地	沖積地	绳文～近世
2	能登國分尼寺跡	寺跡	冲積地	奈良・平安	16	山口瀬跡	集落跡・未開拓	自然地・昔開拓	绳文～近世
3	仙台石室塚跡	多里遺跡	冲積地	奈良・平安	17	元新田跡	集落跡	自然堤防	弥生～近世
4	南小泉遺跡	集落跡	冲積地	繩文～近世	18	大野田遺跡	集落跡	自然堤防	绳文～中世
5	沖野城跡	城跡	自然堤防	中世	19	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	绳文～近世
6	若林城跡	城跡	冲積地	飛國・江戸	20	下ノ内瀬跡	集落跡	自然堤防	绳文～平安
7	茂ヶ崎城跡	城跡	丘陵	南上原～室町	21	下ノ内瀬跡	集落跡	自然堤防	绳文・秀生・平安
8	鬼塚古墳	古墳	自然堤防	古墳	22	富沢推跡	堀跡	自然地・後醍醐	中世
9	郡山遺跡	官衙跡	自然堤防	弥生・奈良	23	大野田古墳群	古墳	自然堤防	古墳
10	西台煙道跡	包含地	自然堤防	弥生・古墳	24	Eノ瀬跡	道路跡	自然地	绳文～中世
11	北日城跡	城址	自然堤防	繩文～近世	25	安久東遺跡	集落跡地	自然堤防	秀生～近世
12	高田B遺跡	遺跡	後背地	繩文～近世	26	中田南遺跡	集落跡・堀跡	自然堤防	秀生～中世
13	三神峯遺跡	集落跡	丘陵	绳文・平安	27	中田南中瀬跡	集落跡	自然堤防	奈良・平安
14	富沢遺跡	水田跡	後背地	臼石郡～近世	28	戸ノ内瀬跡	集落跡地	自然堤防	古墳・平安・中世

第1図 周辺の遺跡

### Ⅲ 道路の立地と面積



第2図 調査区位置図

中世から近世にかけては遺跡の調査例が少なく、詳細は不明である。富沢遺跡の北東部では農民層の屋敷跡、水田跡が発見されている。

仙台城の築城、城下町の建設以降、大野田、富沢周辺は大野田村、富沢村となった。

明治に入ると大野田村は西多賀村に併合され、大野田の字名が残る。昭和7年には仙台市に併合され、仙台市大野田となった。葉菜の栽培を中心とする近郊農業地域として発達してきたが昭和30年代後半から住宅・工場地化が顕著となり、市街地化が進んでいる。最近では都市計画道路の整備が進み、周辺一帯の景観はさらに変貌の一途をたどっている。

### 3. これまでの調査成果

元袋遺跡の第1次調査は昭和61年、当時登録されていた元袋Ⅲ遺跡の東側隣接地の宅地造成工事に伴う事前調査として昭和61年4月10日から7月22日まで行われた。

約1820m<sup>2</sup>を調査し、検出された遺構は奈良時代の堅穴住居跡3軒、平安時代の堅穴住居跡3軒・堅穴造構1基・掘立柱建物跡3棟・土坑15基・溝跡7条、中世の溝跡1条、他に河川跡1条、ビット多数である。出土遺物は土師器、須恵器が中心で、他に繩文土器、弥生土器、陶器、磁器、瓦、石製品、金属製品が出土している。平安時代の土師器の坏には「太」と墨書きされたものもみられる。

遺構・遺物から奈良・平安時代、中世の集落跡と考えられた（渡部：1987）。

## III 調査の方法と調査経過

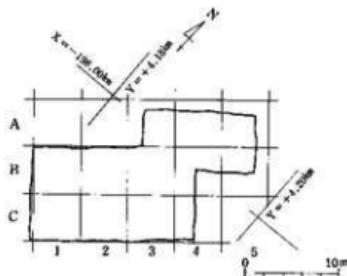
### 1. 調査の方法

調査区は建物の配置に合わせて任意の5mグリッドを組み、北西-南東ラインについて北から、アルファベットA・B・Cを、南西-北東ラインに西から、算用数字1・2・3・4・5を付してグリッドを設定した。南北のグリッドラインは真北から50度東偏している。調査面積は232.4m<sup>2</sup>である。

表土排除は試掘調査の結果に基づき、バッタホーで行い、遺構確認作業からは人力で行

った。基本層第II層上面で遺構を確認し、精査を行った。その後、下層の遺構、遺物の有無を確認するため、調査区内に4ヶ所の深掘り区を設定し、掘り下げた。

標高の原点は都市計画道路『川内・柳生線』建設予定地内の基準点から移設したBM（標高10



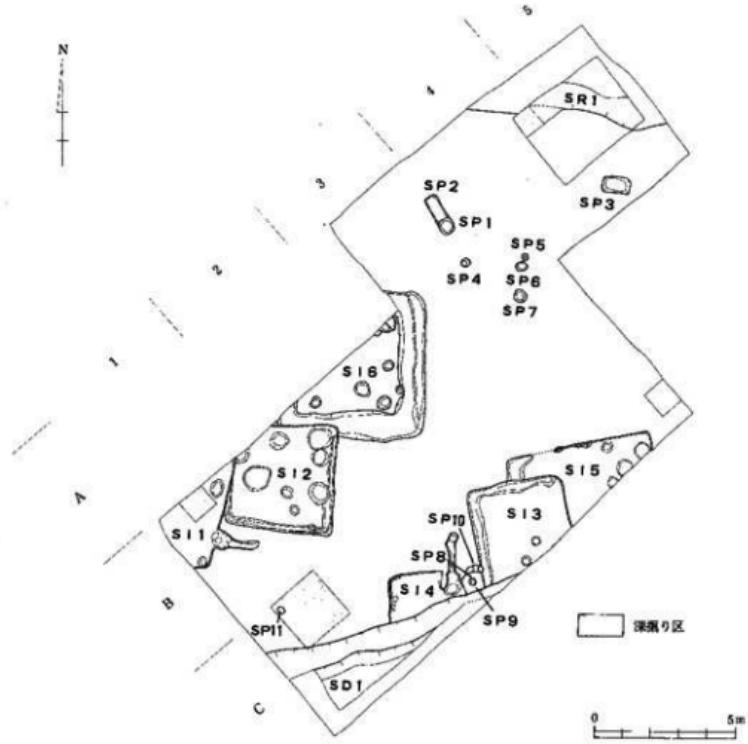
第3図 グリッド配置図

### III 調査の方法と調査経過

・000m) を使用した。実測図は1/20で作成し、写真は35mm判モノクロとリバーサルを使用した。

## 2. 調査経過

野外調査は平成5年4月12日から開始した。バックホーによる表土排除の後、人力による遺構確認作業に入った。確認された遺構は堅穴住居跡6軒、溝跡1条、河川跡1条、ピット11個である。耕作が深く及んでおり、遺構（特に堅穴住居跡）の残存状況は極めて悪い。南西部から遺構別に番号を付し、精査を開始した。北東部については耕作が南西部より深く及んでおり、遺構の検出はピット1個にとどまった。4月22日から4ヶ所で下層の深掘りを行ったが、下層から遺構、遺物は検出されなかった。4月23日に調査区の全景写真の撮影、27日には平面図、基本層の柱状図の作成を終了した。5月に住居跡下面の遺構の有無の確認、実測図の一部追加を行い、5月11日には一切の野外調査を終了した。



第4図 遺構全体図

## IV 基本層序

調査区は荒川の南岸に形成される自然堤防上に位置している。基本層第I層～第VII層まで確認した。上層は砂質シルトが主体で、下層にいくほど粘性が強くなる傾向がみられる。第II層上面で遺構を検出した。III層以下の層は調査区内に設定した4ヶ所の深掘り区で確認した。下層から遺構、遺物は検出されなかった。基本層は北東に向かって緩やかに傾斜している。

**第I層** 現在の畑の耕作土である。黄褐色の砂質シルトで層厚は約40cm～70cmである。耕作の影響で下層の遺物が巻き上げられて含まれている。

**第II層** 上面が遺構検出面である。明黄褐色の砂質シルトで層厚は約25cmである。層は北東方向、荒川に向かって緩やかに傾斜している。

**第III層** にぶい黄褐色の砂質シルトで層厚は約10～15cmである。II層同様、北東に向かって傾斜している。

**第IV層** 褐色のシルト質粘土で、粘性がきわめて強い。層厚は約10cmである。

**第V層** にぶい黄橙色の粘土質シルトで、粘性が強い。層厚は約30cmである。

**第VI層** にぶい黄橙色のシルト質粘土である。V層より粘性が強い。

**第VII層** 灰黄褐色のシル

ト質粘土である。

層厚は約10cmであ  
る。

**第VIII層** 途中までしか掘

りこんでいないた

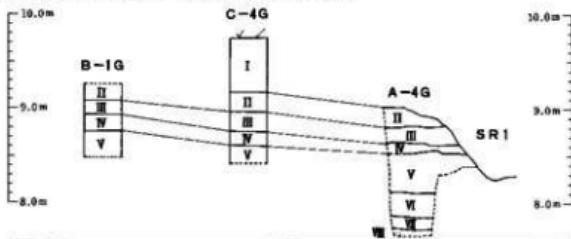
め、層厚は不明で

ある。灰色のシル

ト質の砂である。

ややグライ化して

いる。



層位	土色	土性	特徴
I	10YR 5/6 黄褐色	砂質シルト	現耕作土
II	10YR 5/6 明黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色砂質シルトを小ブロック状に含む。遺構検出面
III	10YR 5/4 にぶい黄褐色	砂質シルト	明黄褐色砂質シルトを小ブロック状に含む。皮を少部分含む。
IV	10YR 4/4 褐色	シルト質粘土	
V	10YR 4/3 IC-5 黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄、マンガン鉱を多く含む。
VI	10YR 7/2 にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を多く含む。
VII	10YR 7/2 黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を多く含む。
VIII	10YR 7/1 褐色	シルト質砂	ややグライ化

第5図 基本層序・土層柱状図

## V 検出遺構と出土遺物

検出した遺構は堅穴住居跡6軒、溝跡1条、河川跡1条、ビット11個である。出土遺物は土師器が多く、他に陶器、磁器、須恵器、弥生土器、石器がある。

堅穴住居跡は残存状況が悪く、床面下まで耕作が及んでいるものもあった。そのよう

な場合、住居内で検出したピットが必ずしも住居に伴わない可能性も考えられるが、住居以外の部分にピットが少ないと、住居内と住居外のピットでは堆積土に違いがみられることから、住居に伴うものとして扱った。

## 1. 壴穴住居跡

### S I 1 壴穴住居跡

〔位置・重複関係〕 B-1 グリッドで検出した。S I 2 壴穴住居跡と重複しており、これより新しい。

〔平面形・規模・方向〕 調査区外西側に延びるため、平面形、規模とも不明であるが、東西2.1m以上、南北4.0m以上の方形と考えられる。方向はE-15°-Sである。

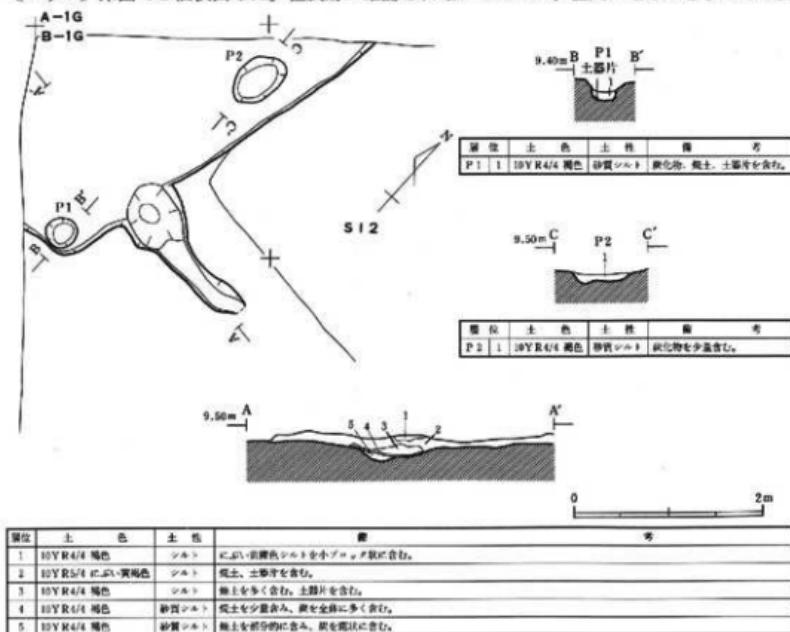
〔堆積土〕 2層に分けられた。土器片や少量の炭を含んでいる。

〔壁〕 耕作の影響で残存状況は悪いが、ほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は6cm~12cmである。

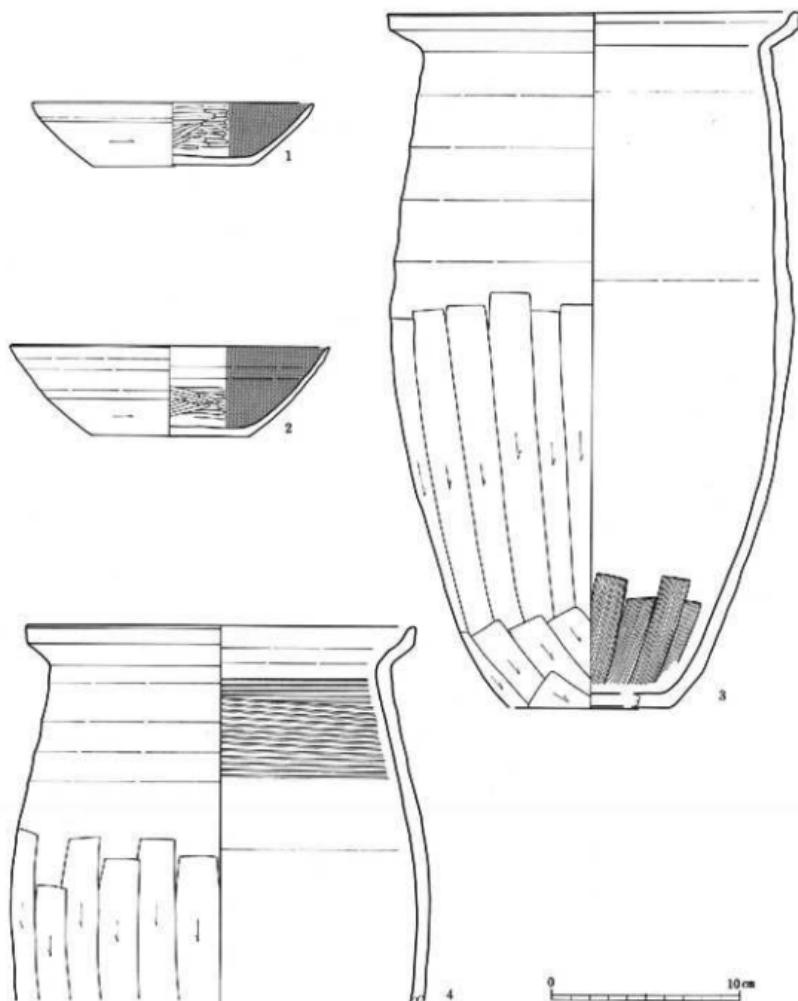
〔周溝〕 検出されなかった。

〔床面〕 基本層Ⅱ層を床面としている。

〔ピット〕 床面で2個検出した。柱痕跡が確認されなかったので、柱穴になるかどうかは不明



第6図 S I 1 壴穴住居跡平面図・セクション図



図番号	発見番号	種別	跡形	層位	測 定		底 厚	高 度	考	写真回数
					外 面	内 面				
1	D-1	土器	环	F1	ロクロナギ ト平底	ハラケメリ	ヘラミガヤ・黒色處理	2/3	15.0 8.4 3.4	壁厚2.5~5.5mm 26-1
2	D-2	土器	环	F1	ロクロナギ 下平底	ハラケメリ	ヘラミガヤ・黒色處理	1/4	17.0 8.4 4.8	壁厚2.5~5.0mm -----
3	D-3	土器	環	2層	ロクロナギ 下平底	ハラケメリ	ロクロナギ 下平底	2/3	22.0 8.6 32.2	底部ハラケメリ 26-2
4	D-4	土器	束	基本層 2層	ロクロナギ 下平底	ハラケメリ	ロクロナギ 上平底	1/8 (29.8)	不明 29.2 以上	片面研磨付箇 26-3

第7図 S11出土遺物

である。深さはいずれも 8cm~10cm である。

〔カマド〕 燃焼部は住居の東側に張り出しており、基本層Ⅱ層を掘り込んで構築している。天井部は残存していないかったが、幅約50cm、奥行約70cm と推定される。煙道部は長さ約100cm、幅約25cm~30cm、深さは約10~12cm である。側壁は火熱を受け赤変している。堆積土は3層に分けられ、焼土、炭を多く含み、土師器片を含んでいる。

〔出土遺物〕 堆積土、ピットから土師器片81点（ロクロ使用55点、ロクロ不使用26点）、須恵器片2点、弥生土器片4点、不明土器片25点が出土している。

第7図にはピット1から出土したロクロ使用の土師器壺2点と堆積土中から出土したロクロ使用の土師器甕2点を図示した。

（第7図1、2）ロクロ使用の壺である。外面体部下半から底部に回転ヘラケズリが施され、底部切り離しは不明のものである。内面には体部は横方向、底部は井桁状の緻密なヘラミガキ・黒色処理が施されている。1は口縁部にかけて開き気味にまっすぐたち上がる。2はやや内寄するが、開き気味に立ち上がる。1、2とも器厚は約2mm~5mmと極めて薄い。また口径に対する底径の比は1が1:0.56、2が1:0.51である。

（第7図3、4）ロクロ使用の甕である。3は長胴形である。下半部は外面が縦方向のヘラケズリ、内面は縦方向のヘラナデが施されている。4は内外面ロクロ調整で、外面胴下半部は縦方向のヘラケズリ、内面は回転ハケメが施されている。

## S I 2 穫穴住居跡

〔位置・重複関係〕 B-1、2 グリッドで検出した。S I 1 穫穴住居跡、S I 6 穫穴住居跡と重複しており、S I 6 より新しく S I 1 より古い。

〔平面形・規模・方向〕 調査区外北西側に延びるが、ほぼ一辺約3.8m~4.0m の正方形と推定される。方向はN-5°-Eである。

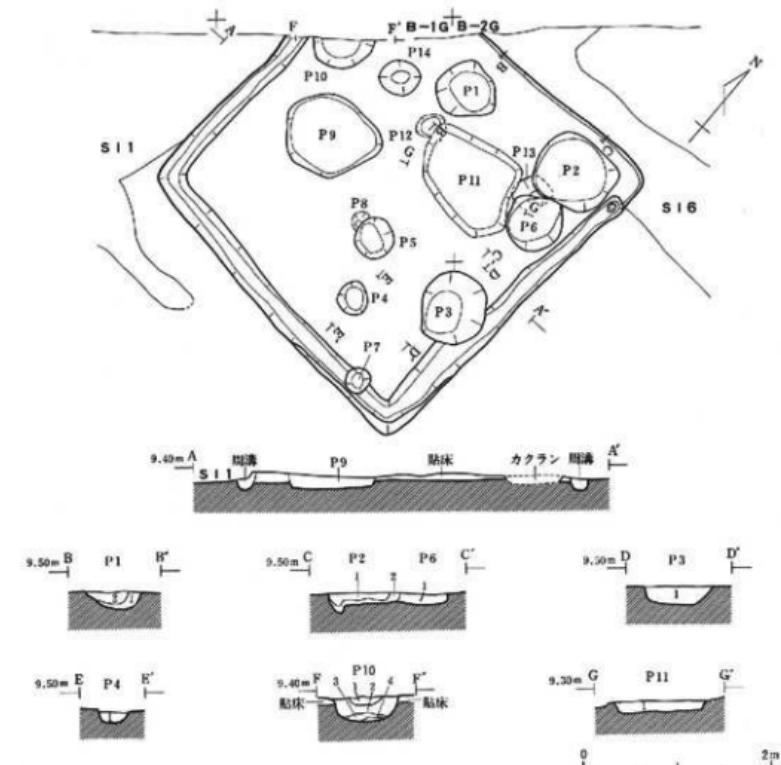
〔堆積土〕 床面で検出しているため、ほとんど残存していない。

〔壁〕 残存していない。

〔周溝〕 北辺を除き、ほぼ住居の全周をめぐる。上端幅約20cm、下端幅約10cm、深さ約12~20cmで、断面形はU字形である。

〔床面〕 貼床である。にぶい黄褐色のシルトで焼土、炭を多く含んでいる。厚さは6~16cm である。

〔ピット〕 床面でピット1から10を検出した。ピット10は住居の北西側に位置し、直径約75cm、深さ約20~28cm の幅広いU字形の断面形で、焼土、炭を多く含んでいる。カマドに関連する施設の可能性がある。またピット7は住居の壁柱穴の可能性がある。貼床を除去して、ピット11~14を検出した。ピット11は不整橢円形の浅いピットで、焼土、炭を多く含み、土器片を含ん



層位	土色	土性	縞
最底	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	明黄色シルトを小ブロック状に多く含む。土粒子を含む。
同上	10YR4/4 黄色	シルト	明黄色シルトをブロック状に含む。
P1 1	10YR4/4 黄色	砂質シルト	明黄色砂質シルトを小ブロック状に含み。塵土、炭化物、土粒子を含む。
2	10YR4/4 黄色	砂質シルト	明黄色砂質シルトを小ブロック状に含み。塵土を基盤的に含む。
P2 1	10YR4/4 黄色	砂質シルト	明黄色砂質シルトを小ブロック状に含み。塵土、炭化物、土粒子を含む。
2 2-SY7/4 深褐色	砂質シルト	明黄色砂質シルトを小ブロック状に含む。塵土、炭化物、土粒子を含む。	
P3 1	10YR4/4 黄色	砂質シルト	明黄色砂質シルトを小ブロック状に含み。塵土、炭化物、土粒子を含む。
P4 1	10YR4/4 黄色	砂質シルト	明黄色砂質シルトを小ブロック状に含み。塵土、炭化物を含み、土粒子を少量含む。
P5	10YR4/4 黄色	砂質シルト	明黄色砂質シルトを小ブロック状に含み。塵土、炭化物をまじて含む。
P6	10YR5/4 に近い黄褐色	砂質シルト	明黄色砂質シルト。にほん赤褐色砂質シルトを小ブロック状に含み、黒化物、塵土をブロック状に多く含む。土粒子を含む。
P7	10YR4/4 黄色	砂質シルト	明黄色砂質シルトを小ブロック状に含む。
P8	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	明黄色シルトを小ブロック状に含む。
P9	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	ビードロ状、明褐色、明褐色シルトを小ブロック状に含み。灰褐色シルトを縦断的に小ブロック状に含む。
P10 1	10YR2/3 黄褐色	砂質シルト	明黄色砂質シルトを小ブロック状に含み。塵土、炭土を多く含む。
2	10YR5/4 に近い黄褐色	砂質シルト	明黄色砂質シルトを小ブロック状に含み。塵土、炭土、土粒子を含む。
3	10YR5/3 黄褐色	砂質シルト	明黄色砂質シルトを小ブロック状に含み。塵土、炭土を1層以上多く含む。
4	10YR5/4 に近い黄褐色	砂質シルト	明黄色砂質シルトを小ブロック状に含み。塵土を含む。
P11 1	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	明黄色砂質シルトを小ブロック状に含む。塵土、炭土を多く含む。土粒子を含む。
P12	10YR4/4 黄色	砂質シルト	明黄色砂質シルトを小ブロック状に含み。塵土を含む。塵土を多く含む。土粒子を含む。
P13	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	明黄色砂質シルトを小ブロック状に含み。炭化物、塵土、土粒子を多く含む。
P14	10YR4/3 に近い黄褐色	砂質シルト	浅黄色砂質シルトを小ブロック状に含み。炭化物、塵土、土粒子を多く含む。

第8図 S12 壁住居跡平面図・セクション図

でいる。性格は不明である。ピット13、14は柱痕跡は確認されなかつたが、配置からみて、この住居の主柱穴と考えられる。

〔カマド〕検出されなかつた。

〔出土遺物〕貼床、周溝、ピットから土師器片125点（ロクロ使用74点、ロクロ不使用51点）、須恵器片10点、弥生土器片1点、不明土器片111点、剝片石器2点、鉄製品1点が出土している。ほとんどが小破片で、磨滅が著しく図化できるものはない。

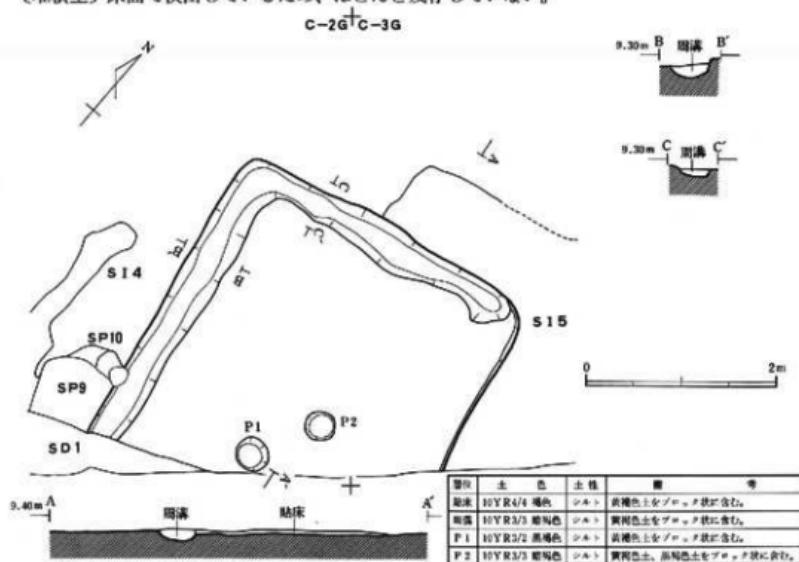
調整がわかる土師器片は少數ではあるが、ロクロ使用の甕には外面にヘラケズリ、内面にヘラナデ、回転ハケメが施されているものがある。ロクロ不使用の甕には外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキ。黒色処理が施されているもの、甕には外面にハケメ、内面にヘラナデが施されているものがある。

### S I 3 積穴住居跡

〔位置・重複関係〕C-2、3グリッドで検出した。S I 4 積穴住居跡、S I 5 積穴住居跡、SP 9、10、SD 1溝跡と重複し、S I 4、S I 5より新しく、SD 1より古い。

〔平面形・規模・方向〕平面形は調査区外南側に延びるため不明であるが、東西約3.5m、南北約3.3m以上の長方形と考えられる。方向はN-10°-Wである。

〔堆積土〕床面で検出しているため、ほとんど残存していない。



第9図 S I 3 積穴住居跡平面図・セクション図

〔壁〕残存していない。

〔周溝〕住居の北辺、西辺をめぐる。上端幅30~40cm、下端幅約22cm、深さ6cm~13cmで、断面形はやや開き気味のU字形である。

〔床面〕ほぼ全面貼床である。厚さは約3~4cmである。褐色のシルトである。

〔ピット〕床面で2個検出した。いずれもほぼ円形で、ピット1は直径約34~36cm、深さ約20cm、ピット2は直径約30cm、深さ約12cmである。柱痕跡は確認されなかった。

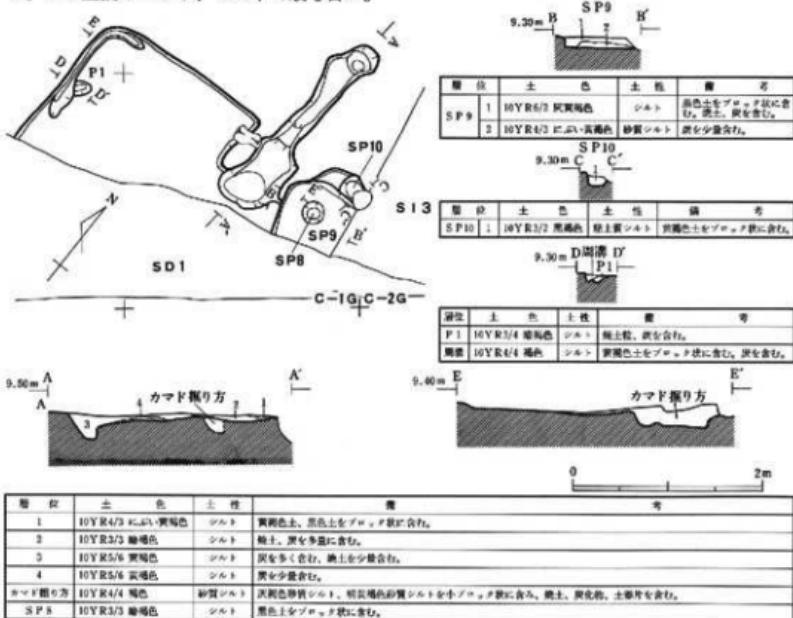
〔カマド〕検出されなかった。

〔出土遺物〕貼床、周溝、ピット等から土師器片（ロクロ使用3点、ロクロ不使用7点）、須恵器片1点、不明土器片3点が出土している。いずれも小破片で固化できるものはない。

ピット1からはロクロ使用の土師器で、内面にヘラミガキ・黒色処理が施された杯片が出土している。貼床、周溝からはロクロ不使用の土師器で、外面上にハケメが施された壺片が出土している。

#### S I 4 竪穴住居跡

〔位置・重複関係〕C-1、2グリッドで検出した。SD1溝跡、S I 3 竪穴住居跡、SP8、9、10と重複しており、この中で最も古い。



第10図 S I 4 竪穴住居跡平面図・セクション図

〔平面形・規模・方向〕平面形は遺構の重複により不明であるが、東西3.3m以上、南北1.6m以上と推定される。方向はN-3°-Wである。

〔堆積土〕1層確認された。にぶい黄褐色のシルトで、黒色土をブロック状に含んでいる。

〔壁〕やや開き気味ではあるがほぼ垂直に立ち上がる。残存壁高は約10cm弱である。

〔周溝〕北西隅で部分的に検出した。上端幅約15cm、下端幅約7cmで断面形は緩やかなV字形である。

〔床面〕基本層Ⅱ層を床面としている。

〔ビット〕1個検出している。ビット1は壁柱穴の可能性もあるが、柱痕跡が確認されていないので断定しがたい。

〔カマド〕燃焼部は奥行約80cm、幅約50cm、深さ約10cmで、底面は火熱の影響で赤変している。天井部は残存しておらず、側壁もほとんど残存していない。堆積土は焼土、炭を多量に含む暗褐色シルトである。燃焼部を構築する際の掘り方を確認している。煙道部は長さ約135cm、上端幅24~36cm、下端幅10~28cm、深さ5~8cmで、断面形はU字形である。先端部にはビットが掘りこまれており、直径約20cm、深さ約25cmの不整円形である。煙道部の堆積土は黄褐色のシルトで、焼土、炭を多く含んでいる。

〔出土遺物〕土師器片25点（ロクロ使用3点、ロクロ不使用22点）、須恵器片1点、弥生土器片1点、不明土器片14点が出土している。いずれも小破片で、図化できるものはない。

堆積土中からはロクロ使用の土師器甕片、ロクロ不使用の土師器甕片、カマド内からはロクロ不使用で、外面にハケメ、内面にヘラナデが施された土師器甕片が出土している。

### S I 5 積穴住居跡

〔位置・重複関係〕C-2、3グリッドで検出した。S I 3 積穴住居跡と重複しており、これよりも古い。

〔平面形・規模・方向〕調査区外南側に延びるため平面形は不明である。東西約5.1~5.2m、南北約4m以上と推定される。方向はN-10°-Wである。

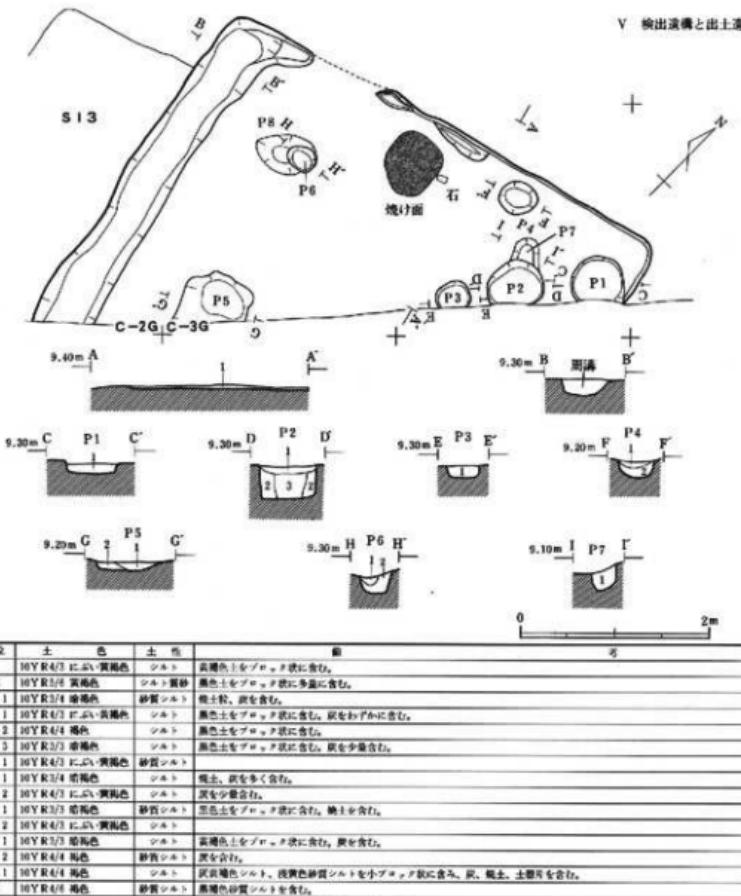
〔堆積土〕にぶい、黄褐色のシルトで、1層である。

〔壁〕削平が著しく、残存壁高は約1cm~3cmで、壁はほとんど立ち上がらない。

〔周溝〕住居西辺で検出した。上端幅約55cm、下端幅約35cm、深さ約17~18cmで、断面形はU字形である。また北辺西側ではこれよりも規模の小さな周溝状の遺構を検出している。

〔床面〕基本層Ⅱ層と一部掘り方埋土を床面としている。北側、ほぼ中央に赤変して固くしまった焼け面がみられる。

〔ビット〕床面でビット1~8を検出した。ビット2は長軸約60cm、短軸約50cm、深さ約50cmで、柱痕跡が確認されている。ビット6、8は重複して検出したが、同一のビットの可能性が



第11図 S15 穫穴住跡平面図・セクション図

考えられる。ピット2と6、8の部分が配置からみて、この住居の主柱穴と考えられる。他のピットに関しては性格不明である。

〔カマド〕検出されなかったが、床面に残る焼け面の部分にカマド燃焼部が存在したと考えられる。煙道部は残存していない。

〔出土遺物〕土師器片22点（ロクロ使用2点、ロクロ不使用20点）、須恵器片1点、弥生土器片3点、不明土器片14点が出土している。いずれも小破片で、図化できるものはない。

堆積土、周溝、ピットからロクロ不使用的土師器片、床面、ピット6からロクロ使用的土師器片が出土している。

### S I 6 穫穴住居跡

〔位置・重複関係〕 A-3、B-2、3 グリッドで検出した。S I 2 穫穴住居跡と重複しており、これよりも古い。

〔平面形・規模・方向〕 一部調査区外西側に延びるため全容は不明であるが、ほぼ方形にめぐる掘り方が残存していることから一辺約5.1m～5.3mのほぼ方形と考えられる。方向はN-1°-Wである。

〔堆積土〕 残存していない。

〔壁〕 残存していない。

〔周溝〕 残存していない。

〔床面〕 残存していない。

〔ピット〕 8個検出している。柱痕跡が確認されなかったため柱穴は不明である。

〔カマド〕 検出されなかった。

〔掘り方〕 断面形は一様でなく、深さは20cm～35cmである。埋土はにぶい黄褐色のシルトで、にぶい黄橙色のシルト、灰白色の砂質シルトをブロック状に含み、土器片を多く含んでいる。

〔出土遺物〕 掘り方埋土中からロクロ不使用の土師器片59点、須恵器片3点、弥生土器片16点、不明土器片113点、剝片石器1点が出土している。ピットからロクロ不使用の土師器片6点、不明土器片2点が出土している。第12図には掘り方埋土中から出土した土師器3点と石器1点を図示した。

(第12図1) 器台片である。受部の一部と脚部のみの残存で、脚部はほぼ直線的に円錐台状に開き、脚部に孔が2個みられる。外面はナデのちミガキ調整、内面はヘラナデ調整である。受部から脚部への貫通孔がみられる。

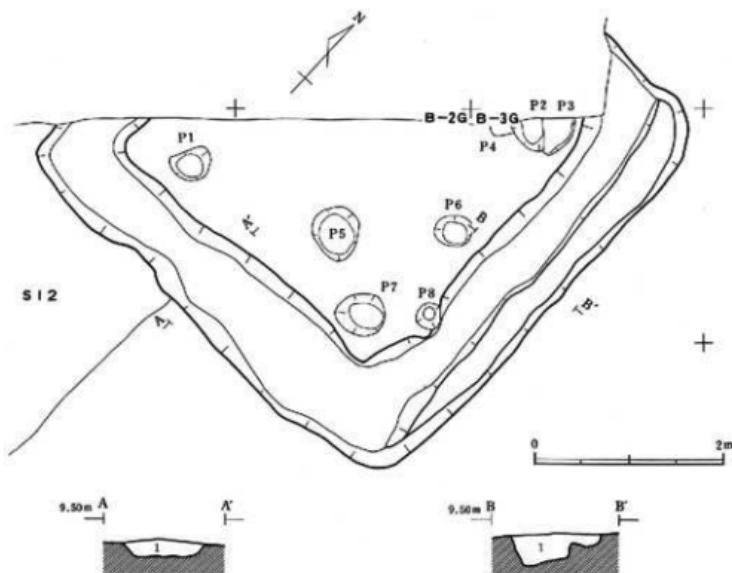
(第12図2) 壁片と考えられるが、小型の甕の可能性もある。口縁部で屈曲し、さらに上方に稜をもちながら外反する。外面は口縁部がナデ調整、下半部は磨滅のため不明である。内面はナデ調整である。

(第12図3) 壁である。外面に稜がつき、口縁部はやや外反する。体部はヘラケズリ、口縁部はヨコナデ調整で、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

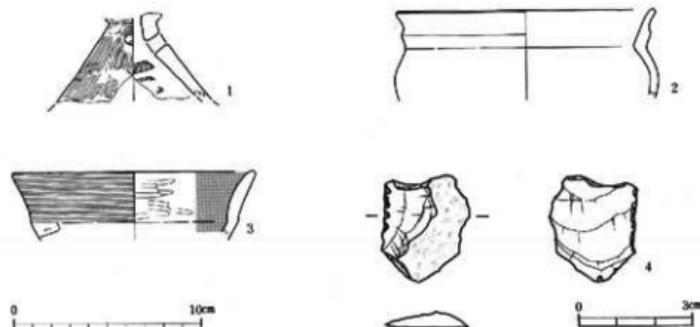
(第12図4) 二次加工のある剝片である。石材は石英安山岩である。

番号	土 色	土 作	備	考
P.1	10YR 4/4 黄色	砂質シルト	淡褐色砂質シルトを小ブロック状に含み、炭化物を少含む。	
P.2	10YR 4/4 黄色	砂質シルト	淡褐色砂質シルトを小ブロック状に含み、炭化物を少含む。	
P.3	10YR 4/4 黄色	砂質シルト	淡褐色砂質シルトを混入する。	
P.4	10YR 5/4 にじ 黄褐色	砂質シルト	にじ、淡褐色砂質シルトを混入する。	
P.5	10YR 3/2 黑褐色	砂質シルト	淡褐色砂質シルトを混入する。	
P.6	10YR 4/4 黄色	砂質シルト	淡褐色砂質シルトを小ブロック状に含み、炭化物を少含む。	
P.7	10YR 4/4 黄色	砂質シルト	淡褐色砂質シルトを小ブロック状に含み、炭化物を少含む。	
P.8	10YR 4/4 黄色	砂質シルト	淡褐色砂質シルトを小ブロック状に含み、炭化物を少含む。	

第1表 S I 6 穫穴住居跡ピット註記表



部位	土色	土性	層	考
1	10YR 4/3 K-5(?) 實褐色	砂土	にい 黄褐色シルト、灰白色軟泥シルトをブローニングに含み、土嚢汚を含む。堅り力強土	



図面号	登録番号	種別	形態	層位	周 長		残存 口徑(復元)	底径	高さ	施 工	考	写真図版
					外 囲	内 道						
1	C-1	土器部	脚台	1層	脚部ヤグのもの:ガモ	ハサツテ	不明	不明	不明	平判	器底から剥離に黄褐色 斑状に2ドリルあり	20-5
2	C-2	土器部	耳?	1層	口縁落チヂ 体部不明	不明	不明	(13.0)	不明	不明	堅密苦しい。	20-6
3	C-3	土器部	系	1層	口縁落 ヨコチヂ 下平削 ハサツテ	ハサツテ・黑色處理	1/4 (13.0)	不明	5.5 以上	—	—	—
4	K-1	二次加工のある剝片	石器	層位	最大長幅	最大厚さ	重 量(g)	鉛	考	否	否	写真図版
					29	34	4	2.7				

第12図 S-16 平面図・セクション図・出土遺物

## 2. 溝 跡

### SD 1溝 跡

〔位置・重複関係〕 C-1、2 グリッドで検出した。S I 3 堅穴住居跡、S I 4 堅穴住居跡、S P 9 より新しい。

〔規模・方向〕 部分的な調査のため、全容は不明である。検出できた幅は約 2 m、深さは約 1 m である。方向は N-72°-E である。

〔堆積土〕 大別で 3 層、細別で 6 層まで確認している。にぶい黄褐色、褐色、褐灰色、灰黄褐色のシルトが主体で、下に行くにつれて灰色味を増し、粘性が強くなる。

〔壁〕 北岸の一部のみの確認である。凹凸がみられるが、ゆるやかに立ち上がる。

〔出土遺物〕 堆積土中から土師器片 12 点(ロクロ使用 3 点、ロクロ不使用 9 点)、須恵器片 1 点、弥生土器片 2 点が出土している。いずれも小破片で、弥生土器片(第 16 図 2)を除いて図化できるものはない。

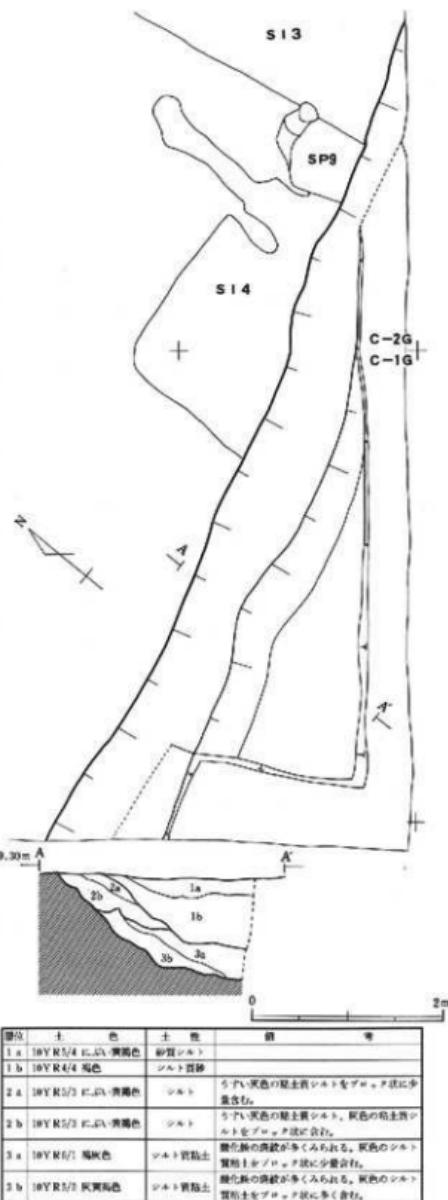
## 3. 河 川 跡

### SR 1河川跡

〔位置・重複関係〕 A-4、5 グリッドで検出した。

〔規模・方向〕 部分的な調査のため、全容は不明である。検出できた幅は約 3.4 m、深さは約 1.4 m である。方向は E-3°-S である。

〔堆積土〕 大別で 7 層まで確認している。にぶい黄褐色、褐色の砂質シルトが主体で、砂、シルト、粘土質のシルトも含んでいる。下にいくにつれて褐色味を増し、砂質土と



第 13 図 SD 1 溝跡平面図・セクション図

粘土質土が互層をなしている。

〔壁〕南岸のみの確認である。

凹凸があり、やや急に立ち上がる。

〔出土遺物〕堆積土中から土師器片16点（ロクロ使用3点、ロクロ不使用5点）、弥生土器片1点、不明土器片8点が出土している。いずれも小破片で、図化できるものはない。

#### 4. その他の遺構と出土遺物

##### ピット

11個検出した。柱痕跡はいずれも確認できなかった。SP 1、2、3、4、5、6から、ロクロ不使用の土師器片28点、不明土器片18点、弥生土器片1点が出土している。時期、性格は不明である。

##### 基本層Ⅰ層の出土遺物

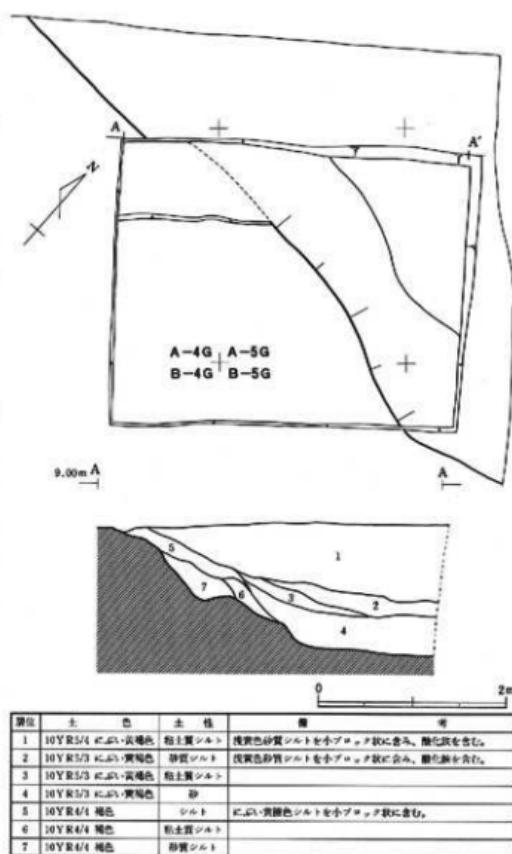
土師器片35点（ロクロ使用7点、ロクロ不使用28点）、須恵器片4点、弥生土器片5点、不明土器片49点、陶器片1点、磁器片1点が出土している。ほとんどが小破片である。

##### 遺構外・層位不明の出土遺物

ロクロ不使用の土師器片17点、須恵器片3点、不明土器片28点、陶器片1点が出土している。ほとんどが小破片である。第15図には土師器2点、石器1点を図示した。また、写真20に陶器片1点を掲載した。

（第15図1）壺片である。外面体部下間に段がつき、内面には段も稜もつかないものである。外面口縁部から体部にかけてヨコナデ、下半部はヘラケヅリ調整で、内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。

（第15図2）器台片である。受部から脚部にかけての貫通孔付近の部分が残存している。脚部



第14図 SR 1 河川跡平面図・セクション図

図番号	登録番号	種 別	形 状	出土地点	層 位	測 定		性 質	出 収	付 銘	考 察	写真図版
						外 囲	内 围					
1	C-4	土器部	片	A-3 G	不明	口縁部-斜面ヨコナギ	ヘリガキ・褐色塗装	1/6 (13.5)	不明	3.2cm上	片端部破壊し 2ヶ所	—
2	C-5	土器部	器台	B-2 G	不明	ヘリナブ	不明	不明	不明	不明	2ヶ所既存	20-9
図番号	登録番号	石器名	石 材	出土地点	層 位	最大長	最大幅	重 量	性 質	考 察	写真図版	
3	K-2	二次加工のある剥片	玉 僧	不明	不明	40	36	6	6.4	剥離あり、自然面あり	20-8	

第15図 その他の出土遺物

に孔の痕跡が2個認められる。外面はヘラナデ調整である。

(第15図3) 二次加工のある剥片で、石材は玉髓である。

1、2は東北地方南部の土師器編年(氏家:1957、1967)では1は国分寺下層式、2は塙釜式に比定されるものである。

(写真20-4) 鉄軸の鉢の破片と考えられるが、香炉の可能性もある。産地は不明である。時期は江戸時代と考えられる。

#### 弥生土器

遺構内、外から破片で35点出土しているが、ほとんどが地文のみのものである。文様の確認できる破片の拓影を図示した。いずれも小破片で、器形は不明である。

(第16図1) (S I 1堆積土2層中) 細い2本の平行沈線で連弧文が描かれている。

(第16図2) (S D 1堆積土中) 壺の体部の可能性がある。撫糸文Rが施され、細い2本の平行沈線で連弧文が描かれている。

(第16図3) (S I 6掘り方埋土中) 2本の平行沈線で連弧文が描かれている。

(第16図4) (S I 6掘り方埋土中) 細い2本の平行沈線文が描かれている。

(第16図5) (S I 6掘り方埋土中) L R 繩文が施されている。

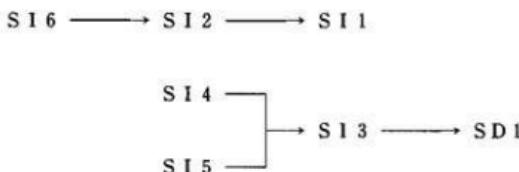
図番号	登録番号	出土遺構	層 位	形 状	部 位	測 定		性 質	考 察	写真図版
						外 囲	内 围			
1	B-1	S I 1	2層	不明	不明	平行沈線文(2条)	不明	—	—	20-10
2	B-2	S D 1	不明	壺?	全体	直矢文(1条)-平行沈線文(2条)	不明	—	—	20-11
3	B-3	S I 6	掘り方埋土	不明	不明	平行沈線文(2条)	ヘリナブ	—	—	20-12
4	B-4	S I 6	掘り方埋土	不明	不明	平行沈線文(2条)	不明	—	—	20-13
5	B-5	S I 6	掘り方埋土	不明	全体?	L R 繩文	不明	—	—	20-14

第16図 弥生土器拓影

1～4はいずれも2本の平行沈線によって、文様を施してある点で共通している。宮城県の弥生土器の編年（伊東：1957）では十三塚式に比定されるものである。5は地文のみであるため、時期は不明である。

### 5. 出土遺物の検討と遺構の所属時期

検出されたおもな遺構の重複関係を整理すると以下のような変遷がみられる。



各遺構とも遺物の大部分が小破片であるため、時期をある程度推定できるものはS I 1のみである。S I 1はビットからロクロ使用の土師器坏2点、堆積土中から甕2点が出土している（第7図）。これらは東北地方南半部の土師器編年（氏家：1957、1967）では表杉ノ入式に比定され、平安時代に位置づけられるものである。表杉ノ入式についてはおもに坏の形態、調整技法によって細分が試みられている（桑原：1969、岡田・桑原：1974、白鳥：1980・1982、丹羽：1983）。S I 1出土の坏は口径に対する底径比が大きく、外面体部から底部にかけて回転ヘラケズリ、内面体部横方向、底部井桁状の緻密なヘラミガキが施される点に特徴がみられる。類似資料は多賀城跡第60次調査S E2101B第III層出土の坏のなかにみられ、多賀城跡出土「C群土器」（白鳥：1980・1982）に属すると考えられている（真山：1992）。この土器群の年代は9世紀前半頃と理解されていることから、出土遺物は少ないが、S I 1の年代は9世紀前半を中心とする時期とみておきたい。また当調査区周辺における類似資料は元袋遺跡第1次調査S I 22出土の坏のなかにもみられる（渡部：1987）。

S I 2、3、4、5については小破片ではあるがロクロ使用の土師器片が出土していることから表杉ノ入式の時期と考えられる。重複関係はあるが時期はおおむね平安時代前半頃とみておきたい。

S I 6は掘り方埋土中からロクロ不使用の土師器3点が出土している（第12図1、2、3）。1、2は前述の土師器編年で塩釜式、3は栗圓式に比定されるもので、塩釜式は古墳時代前期、栗圓式は後期に位置づけられるものである。いずれも掘り方埋土中から出土しているため、これらから住居の時期は推定できないが、出土遺物と重複関係からすると平安時代以前、古墳時代後期以降とみておきたい。

S D 1、S R 1は堆積土中にロクロ使用の土師器片を含んでいることから時期は平安時代以降と考えられるが詳細は不明である。

	上 級 品				須 恵 器 件 数	陶 器 件 数	弥 生 土 器 件 数	石 器 件 数	周 边 器 件 数	鐵 器 件 数	其 他	合 計								
	ロクロ使用		ロクロ不使用																	
	件 数	件 数	件 数	件 数																
S I 1	1	54	11	15	1	1	4	26	0	0	0	113								
S I 2	3	71	15	35	7	3	1	112	2	0	0	259								
S I 3	3	0	1	7	1	0	0	2	0	0	0	14								
S I 4	0	3	0	22	0	1	1	14	0	0	0	44								
S I 5	0	2	5	15	1	9	3	14	0	0	0	41								
S I 6	0	0	26	39	2	1	16	115	1	0	0	201								
S D 1	0	2	2	6	1	0	2	5	0	0	0	17								
S R 1	3	0	2	4	0	0	0	8	0	0	0	17								
S P 1	0	0	0	1	0	0	0	3	0	0	0	4								
S P 2	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	4								
S P 3	0	0	1	3	0	0	0	6	0	0	0	9								
S P 4	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2								
S P 5	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1								
S P 6	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2								
S P 7	0	0	0	3	0	0	0	2	0	0	0	5								
S P 8	0	0	0	17	0	0	0	3	0	0	0	20								
測量外	0	0	5	12	2	1	3	28	0	0	0	51								
馬 A 型 1 頭	2	5	10	18	2	2	5	49	0	1	1	96								
合計	12	137	79	201	17	9	35	289	3	1	1	596								
											新製品 4 古墳品 1									

第2表 出土遺物破片集計表

## VI ま と め

- 元袋遺跡は荒川の南岸の自然堤防上、仙台市太白区大野田字元袋、袋東地内に所在する。
- 基本層第II層上面で竪穴住居跡6軒(S I 1～S I 6)、溝跡1条、河川跡1条、ピット11個を検出した。S I 1は9世紀前半頃を中心とする時期と考えられる。他の竪穴住居跡の時期も重複関係はあるが、おむね平安時代前半頃と考えられる。溝跡、河川跡の時期は平安時代以降と考えられるが詳細は不明である。
- 出土遺物には土師器(ロクロ使用・不使用)、須恵器、陶器、弥生土器、剝片石器があり、整理用平箱で2箱弱の量である。大部分が土師器である。弥生土器、古墳時代前期・後期と考えられる土師器も出土していることから、調査区の近辺に当該時期の遺構が存在する可能性がある。
- 今回の調査区は遺構・遺物から平安時代前半頃を中心とする集落跡と考えられる。

## 引用・参考文献

- 阿部義平 「ロクロ技術の復元」『考古学研究』第18巻第2号 (1971)
- 伊東信雄 「第二章 弥生式文化時代」『宮城県史 古代編』(1957)
- 氏家和典 「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯 (1957)
- 氏家和典 「陸奥国分寺跡出土の丸底杯をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』(1967)
- 太田昭夫 「大槻遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書M」『宮城県文化財調査報告書第71集』(1980)
- 小川淳一 「青木遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書M」『宮城県文化財調査報告書第71集』(1980)
- 岡田・桑原 「多賀城周辺における古代环形土器の変遷」多賀城跡調査研究所『研究紀要I』(1974)
- 角川書店 「宮城県」『角川日本地名大辞典4』(1979)
- 工藤・成瀬 「栗遺跡」『仙台市文化財調査報告書第43集』(1982)
- 桑原滋郎 「ロクロ土師器杯について」『歴史』第39輯 (1969)
- 主浜光朗 「大野田古墳群」『仙台市文化財調査報告書第138集』(1990)
- 白鳥良一 「多賀城跡出土土器の変遷」多賀城跡調査研究所『研究紀要VII』(1980)
- 仙台市教育委員会 「王ノ壇遺跡現地説明会資料」(1992)
- 多賀城跡調査研究所「多賀城跡 II 第60次調査－年報1991」(1992)
- 地図研仙台支社 「新編仙台の地学」きた出版 (1980)
- 丹羽・小野寺・阿部 「清水遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書V」『宮城県文化財調査報告書第77集』(1981)
- 丹羽茂 「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書第96集』(1983)
- 平凡社 「宮城県の地名」『日本歴史地名体系4』(1987)
- 宮城県教育委員会・多賀城跡調査研究所 「多賀城跡 政府跡本文編」(1982)
- 渡部弘美 「元袋田遺跡」『仙台市文化財調査報告書第103集』(1987)

# 写 真 図 版



写真1 元袋遺跡航空写真（昭和36年撮影）

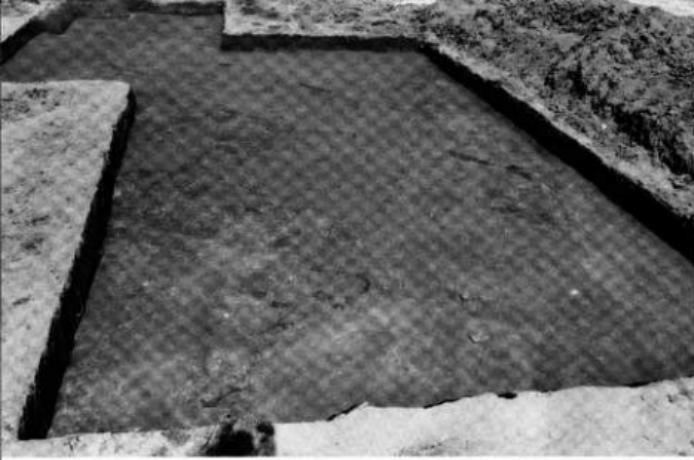


写真2  
遺構確認状況  
(南西より)



写真3  
遺構重複状況1  
S11、S12  
(北西より)

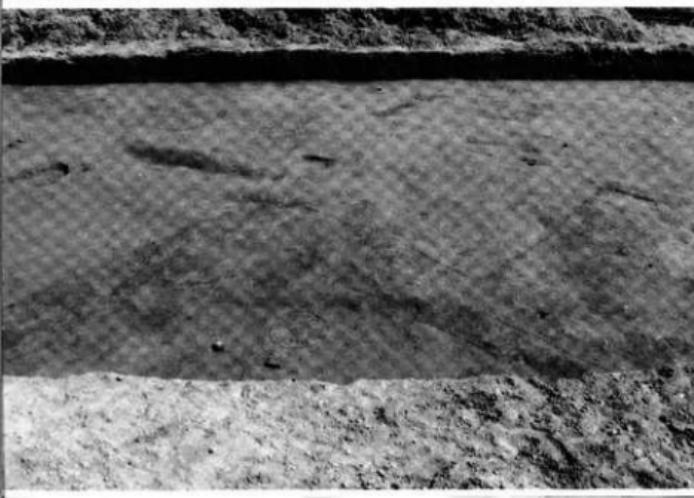


写真4  
遺構重複状況2  
S12、S16  
(北西より)

写真5  
遺構重複状況3  
SD1、SI4、  
SI3(南東より)

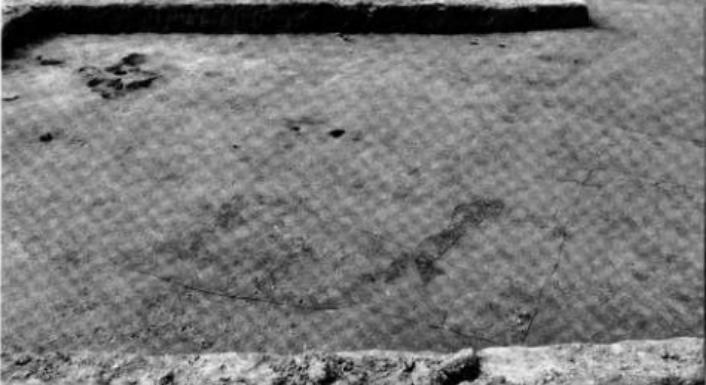


写真6  
遺構重複状況4  
SI3、SI5  
(南東より)

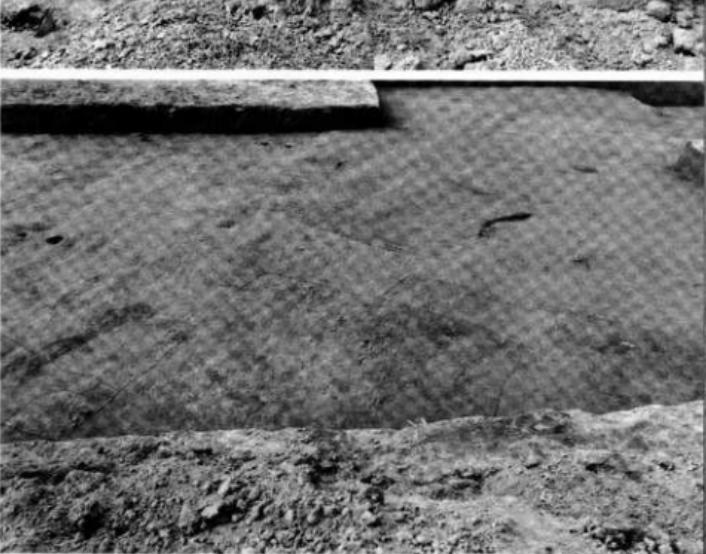


写真7  
基本層序



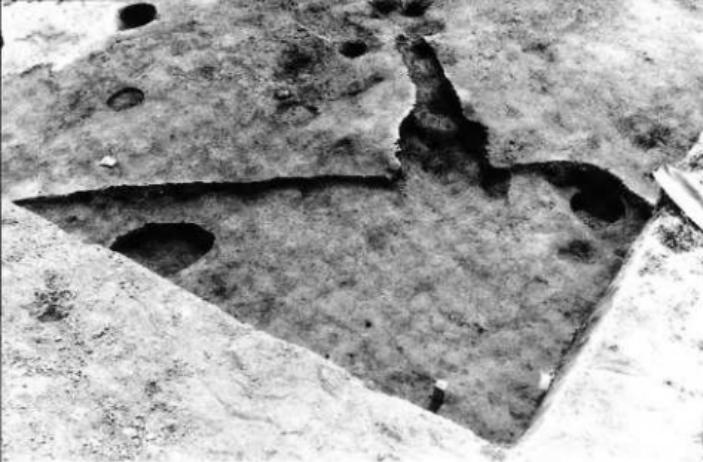


写真8  
S I 1 壁穴住居跡  
全景 (西より)

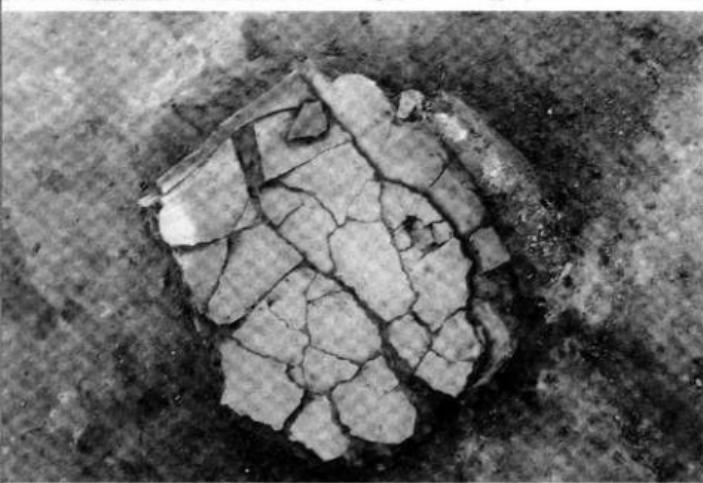


写真9  
S I 1 壁穴住居跡  
遺物出土状況

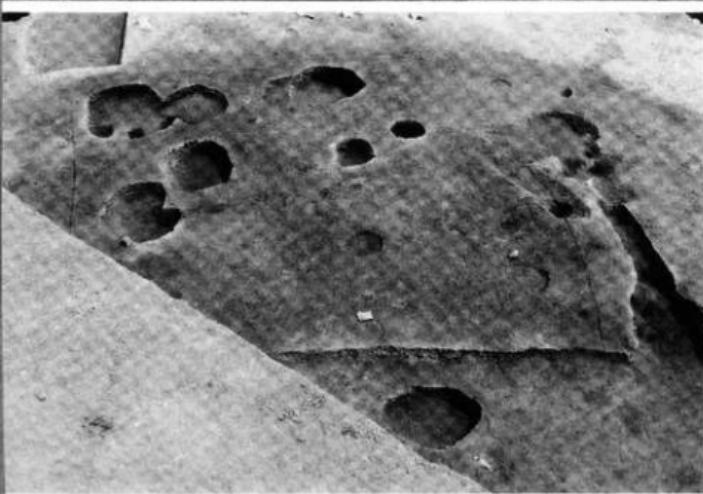


写真10  
S I 2 壁穴住居跡  
床面状況全景  
(西より)

写真11  
S I 2 穹穴住居跡  
床下状況全景  
(西より)

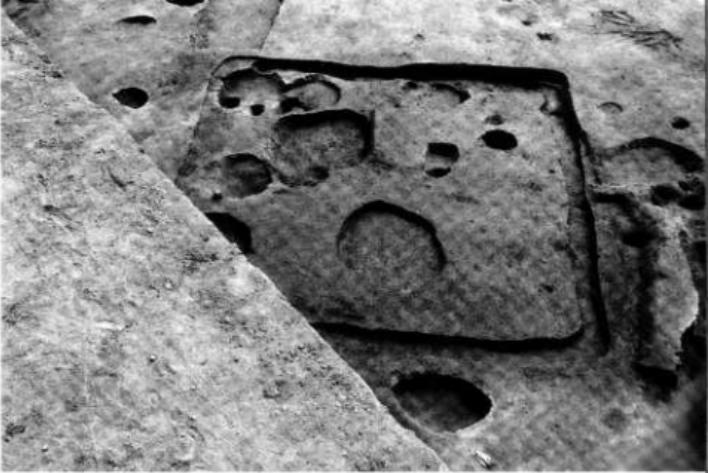


写真12  
S I 3 穹穴住居跡  
全景  
(南より)

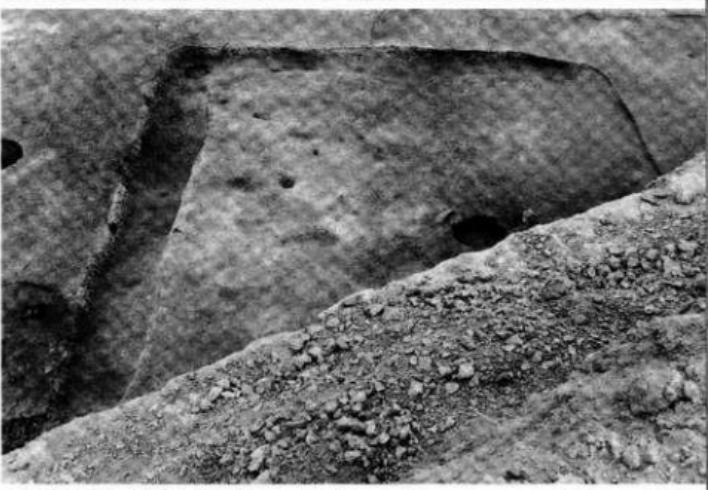
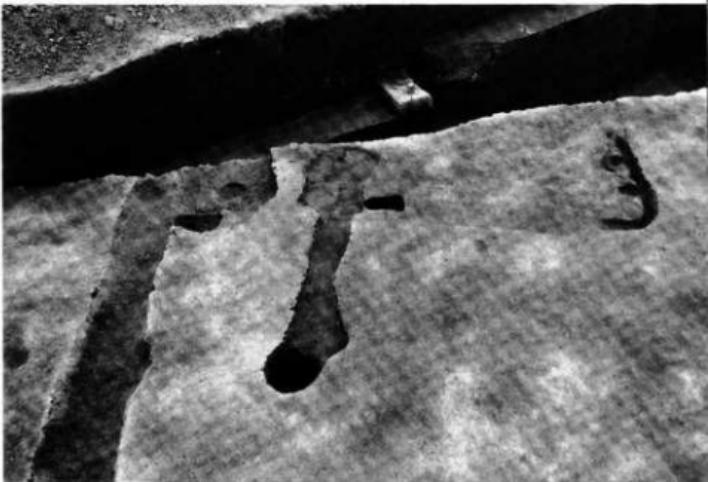


写真13  
S I 4 穹穴住居跡  
全景  
(北より)



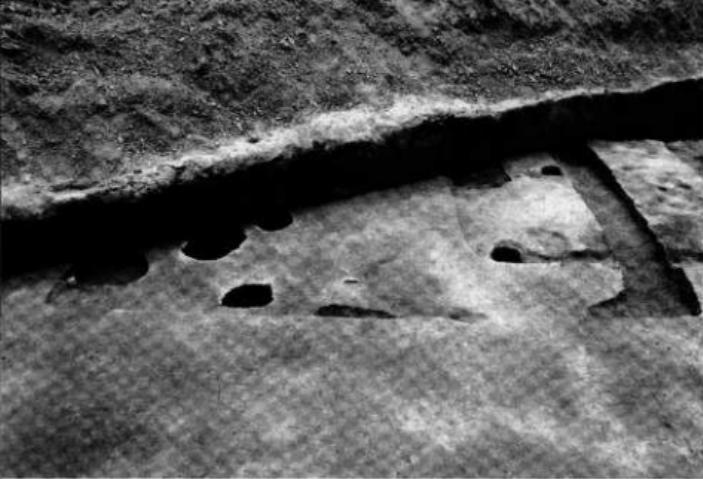


写真14  
S I 5 壁穴住居跡  
全景 (北より)

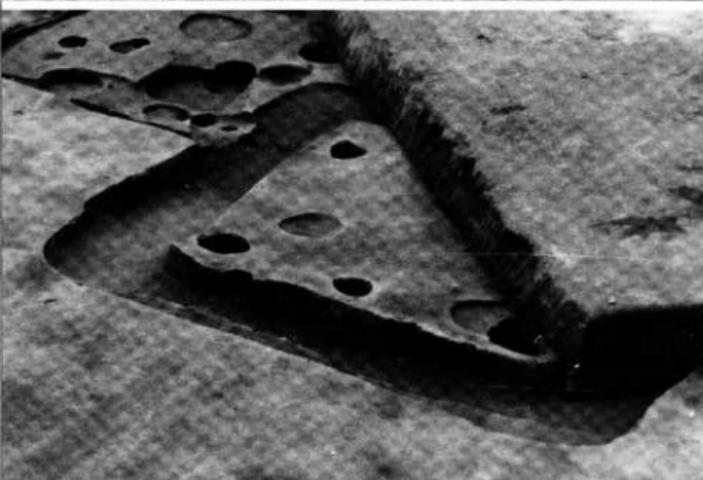


写真15  
S I 6 壁穴住居跡  
全景 (東より)

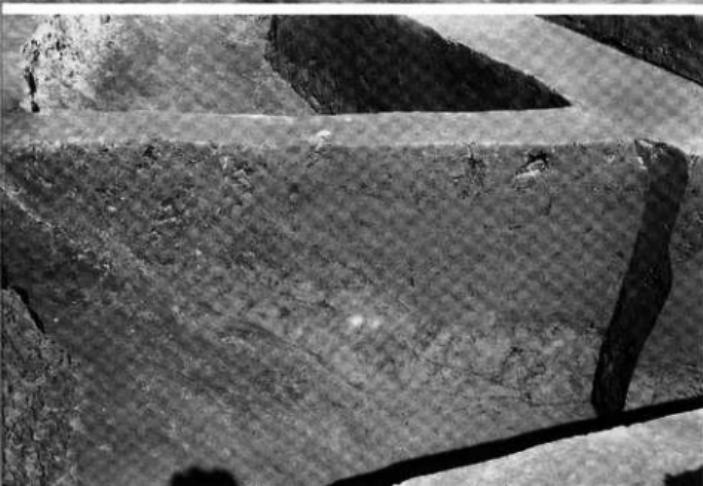


写真16  
SD 1 溝跡  
土層断面

写真17  
SD 1溝跡  
全景 (西より)



写真18  
調査区南西部  
全景 (北東より)

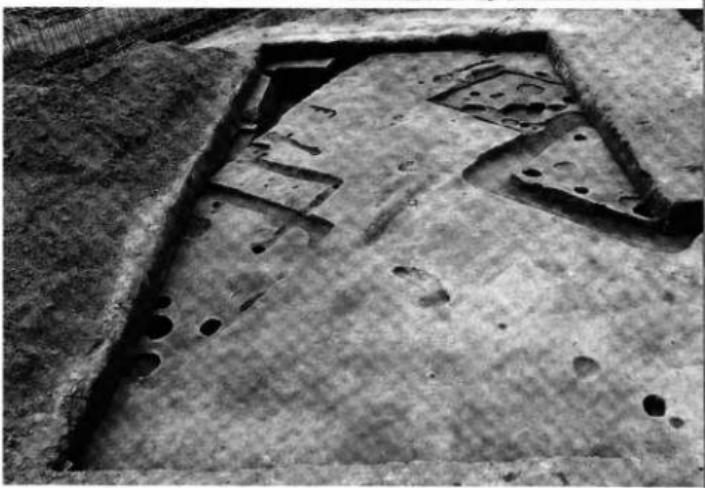




写真19  
調査区北東部  
全景（北東より）

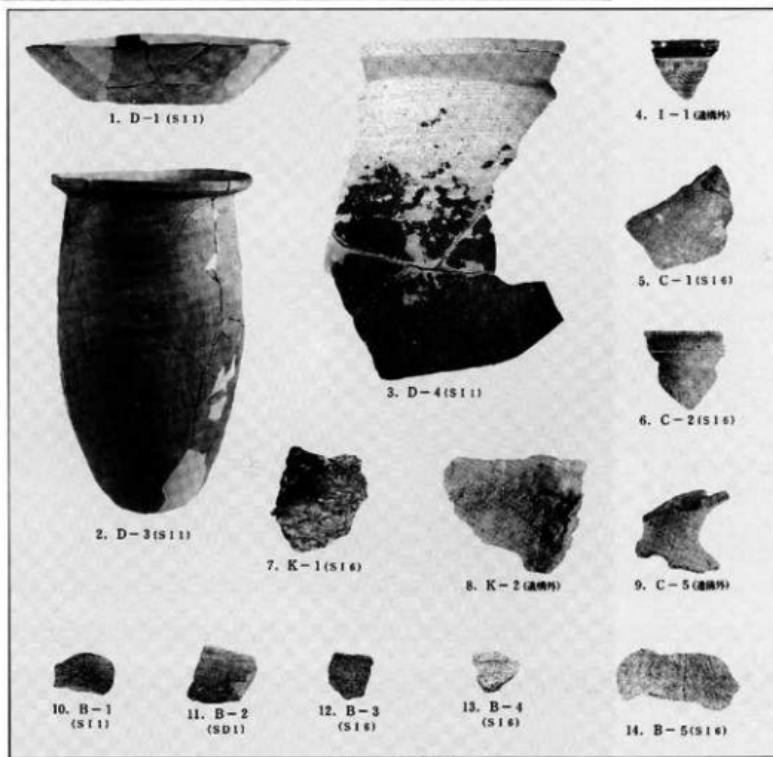


写真20 出土遺物

## 文化財課職員録

課長 白鳥 良一

[管 理 係]	[調査第一係]	[調査第二係]
係長 菅原 澄雄	係長 山中 則和	係長 結城 慎一
主任 村上 道子	主任 木村 浩二	主任 篠原 信彦
主事 福井 健司	教諭 佐藤 好一	教諭 太田 昭夫
主事 庄司 厚	主任 吉岡 恒平	主任 佐藤 洋
主事 斎藤 英治	主事 金森 安孝	主事 佐藤 甲二
主事 佐藤 寿江	教諭 小川 淳一	主事 渡部 弘美
	主事 工藤 順司	主事 工藤信一郎
	主事 主浜 光朗	主事 荒井 格
	主事 斎野 裕彦	主事 中富 洋
	主事 長島 榮一	主事 平間 亮輔
	教諭 稲葉 俊一	教諭 五十嵐康洋
	教諭 菅原 裕樹	教諭 神成 浩志
	主事 渡部 紀	教諭 赤澤 靖章
	教諭 川名 秀一	教諭 竹田 幸司
	教諭 熊谷 裕行	主事 佐藤 淳

---

仙台市文化財調査報告書第188集

### 元袋遺跡

—第2次発掘調査報告書

1994年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区園町3-7-1

仙台市教育委員会文化財課

印刷 株式会社共新精版印刷

仙台市宮城野区日の出町2-4-2

TEL 236-7181

---

